

「ペプチドワクチン」、実用化に向け最終段階へ

●話題
FOCUS
フォーカス

副作用少ないがん治療の選択肢に 久留米大学がんワクチンセンター

前立腺がん対象の「治験」経て新薬承認へ

患者の「免疫力」用いた新療法

がん治療の現場に、新たな選択肢を加えるための新薬の研究・開発が、実用化に向けて大詰めの段階を迎えている。

全国の大学等で研究が進められている新薬「がんペプチドワクチン」の実用化に、最も近付いている研究機関の一つが、久留米大学がんワクチンセンター（久留米市国分町）だ。現在、富

士フィルムと提携して、前立腺がんを対象としたテラーメード型ワクチンの第Ⅲ相臨床試験（治験）を進めており、ここで得られた結果でワクチンの有効性・安全性が厚生労働省に認められれば、晴れて全国初のがんペプチドワクチンの製品化が実現することになる。

研究を主導してきた伊東恭悟



伊東恭悟
がんワクチンセンター
久留米大学 所長

がんワクチンセンター所長は、「これまでの臨床試験で、がんの増大を抑え、副作用も少ないということを示す有効なデータが数多く揃っている。国内初の新薬なので承認に向けたハードルは高いが、

これ乗り越えてがん治療の新たな選択肢にがんペプチドワクチンを加えたい」と実用化へ向けた意気込みを語る。

「ペプチド」とは、たんぱく質の断片のことを指し、がんペプチドワクチンでは100個程度のアミノ酸から人工的に合成したペプチドを用いている。同ワクチンは、がん患者自身が持つ免疫力（キラーT細胞）を高めて、がんの増大を抑制する働きを持ち、がんの第4の治療法として注目を集める「免疫療法」を具体化する新薬だ。

その最たる特徴は、「副作用が少ないこと」。進行したがん治療の現場で多く用いられている「抗がん剤」には、がん細胞を攻撃する機能が備わっているものの、同時に正常な細胞も損傷させてしまうので、激しい副作用を伴うケースが多いことが知られている。一方のがんペプ



13年に久留米大学医療センターの敷地内に開設した「がんワクチンセンター」（久留米市国分町）

チドワクチンは、体内の免疫に備わる細胞に、がんを攻撃するよう「誘導」する。がん細胞の目印となる「ペプチド抗原」と同一のワクチンを投与し、がん

「キラーT細胞」を誘導。同細胞が

目印を頼りにがん細胞をピンポイントで攻撃し、その増殖を抑え込むというのが基本的な仕組みだ。

がん細胞の目印となるペプチド抗原の反応は患者によって異なるため、31種類のペプチドの中から、血液検査で調べた患者一人ひとりに合ったペプチドを2〜4種類を選んで投与する。これが、「テラーメード型」と

呼ばれる所以という。

体内の細胞を用い、がん細胞以外には攻撃を加えないことから、抗がん剤治療に付き物だった副作用が非常に少ないという点で、同ワクチンが最も評価を集めるポイントだ。がん治療の現場における実用化を望む声の後を絶たず、実際に、「全国のみならず海外からも、日々治験の問い合わせが舞い込んでいる」という。